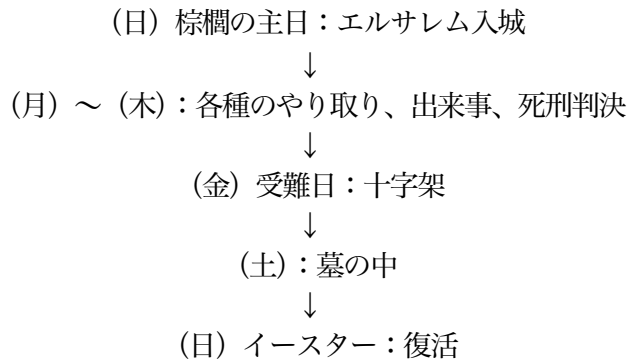


ヨハネによる福音書 12章 12～19節

最後のエルサレム入城

- ・ 今月の箇所は、イエスの生涯における最後のエルサレム入城の場面です。
- ・ ここに記された出来事は 通常、「棕櫚の主日」のそれというふうに言われます。
それは、13 節にある「なつめやしの枝」という名称が以前の文語訳で「棕櫚の枝」と、また口語訳でも「しゅろの枝」と訳されていたためです。しかし、現地の実情からして、「なつめやしの枝」とするほうが正確なようで、現在の新共同訳ではこちらの訳語を当てています。
〔参考〕しゅろの木：やし科の常緑高木。10m 前後。頂に、葉が細かく裂けて団扇状に広がる。ブラシ、縄、箒などに使用。⇔ なつめやしの木：やし科の常緑高木。20～30m。頂に、葉が鳥の羽のように広がる。実がナッツに似た香りを放つ。食用。
- ・ エルサレム入城後の展開はどのように進むでしょうか。流れを簡潔にまとめると、次のようになります。



- ・ これからも分かるように、イエスはエルサレム入城から一週間も経たぬうちに、十字架につけられます。十字架のクライマックスに向け、時が緊迫の速さで過ぎていきます。
- ・ このわずか一週間にも満たない事柄を、ヨハネ福音書はなんと その 1/3 以上のページ (12:12～19:42) を割いて書き留めています。復活の記事 (20～21 章) まで含めると、半分近くのページになります。
- ・ そこに込められたヨハネの思いとは いったい、どんなものだったのでしょうか。福音書を読む者たちに、何を伝えたいと願ったのでしょうか。

退避先からエルサレムへ

(聖書地図6「新約時代のパレスチナ」参照)

- ・ エルサレムへの入城に先立ち、イエスはエフライムに一時 退避しておられました (11:54)。
そこから、海面下約 300m のエリコを経、ヨルダン川西側のベタニアへと行かれます (12:1)。
- ・ このベタニアはマルタ、マリア、ラザロの一家が暮らす村で、イエスは彼らと親しくされていたよ

うです。11 章の 3 節をみると、マルタとマリアの姉妹が人を遣わし、イエスにこう言わせています。

「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです」。この「あなたの愛しておられる者」というのはほかでもない、彼らの兄弟ラザロのことです。

- ・このようにして、エルサレム入城から十字架までの数日間、イエスは彼らの家に宿を取り、ベタニアとエルサレムを行き来したと考えられます。
- ・エリコからエルサレムまで、直線距離にして約 25 km、実行程で約 30 kmほどになります。しかも、エルサレムは海拔約 800m に位置しているため、エリコとの高低差は約 1,100m。そして、ベタニアとエルサレムは約 3 km の距離にあります。
- ・イエスはこれらの道のりをどのような思いで歩かれたのでしょうか。どのような祈りをもって、エルサレムとの間を行き来されたのでしょうか。

群衆による歓迎 (12~15)

- ・エルサレムに入城されるイエスを、大勢の群衆が^{おおぜい}歓喜して迎えます。その手には「なつめやしの枝」(13)がありました。
- ・イスラエルでは、なつめやしの枝が公的な祝賀などによく用いられました。
ちなみに、エリコはなつめやしが多く、「なつめやしの町」とも呼ばれていました。その枝などが、エリコからエルサレムに搬入されていたようです。
- ・そのようにしてイエスを迎えた群衆たちは、2 種類の人々から成っていました。
 - ① そこには、元よりエルサレムの住人だった人たちがいました。彼らは(すぐ前の) 11 章に記されている「ラザロの生き返り事件」を目撃したか、あるいは聞いてすでに知っていました。
 - ② そこに、各地から巡礼者たちがやってきます。そして、その彼らに、①の住人たちがラザロの事件のことを話して聞かせます。
こうして、①②共々に、歓喜のうちにイエスを出迎えたのでした。
- ・書き出しにある「祭り」(12)とは「^{すぎこしさい}過越祭」のことで(11:55、12:1 参照)、祭りの期間中、15 万人余りもの巡礼者がエルサレムを訪れたといえます。
*過越祭とはユダヤ教の 3 大祭りの一つで、イスラエルの民がエジプトから救い出されたことを祝う祭り。エジプトの上に災いをもたらした神が、その一方でイスラエルの家は過ぎ越し、これをエジプトから解放してくださったことを感謝して記念するもの。
- ・その祭りに来ていた大勢の群衆が「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように、イスラエルの王に」(13)と言って、叫び続けたと言います。これは詩編 118:25~26 の一部を修正して歓呼したもので、元々は過越祭に来た人々の願いの言葉であり、その彼らに祝福を祈った言葉でした。
- ・「ホサナ」とは元来、「今こそ、救い給え」との表現です。ただし、この当時は「万歳!」といった程度のかげ声になっていたのかしれません。

また、「主の名によって来られる方」とはメシア(救い主)に捧げられる一種の称号で、「イスラエ

ルの王」というのもメシアの意味合いが込められた呼び方でした。

- ・ここに見て取れるのは、熱気と興奮に^{あふ}溢れて イエスを歓迎する群衆たちの姿です。

しかし、このわずか 5 日後に いったい、何が起きるのでしょうか。「殺せ。殺せ。(イエスを) 十字架につけろ」(19:15) と、その同じ人間たちがそう叫ぶのです。

- ・そこに、私たちははたして、何を見るのでしょうか。人の本質に関わる何を？ その中に歩を進められるイエスの何を？

預言の成就 (14~15)

- ・15 節は、ゼカリヤ書 9 章 9 節からの引用です。
- ・「ろばの子」(14、15) とは平和と柔和の象徴で、そのろばの子に乗る王というのは力や武器によらない「平和の王」、慈しみをもって人々に仕える「柔和な救い主」を意味しています。
- ・これがイエスのエルサレム入城において成就したというのです。

弟子たちの理解 (16)

- ・ですが、「弟子たちは最初 これらのことが分からなかった」といいます。
そして、「イエスが栄光を受けられたとき、それがイエスについて書かれたものであったということ思い出した」というのです。
- ・「これらのこと」とは、(上述の) ゼカリヤ書の預言が意味するところです。
- ・「栄光を受けられたとき」とは、ヨハネの福音書においては、イエスが十字架に死なれたときを意味しています。
- ・弟子たちが最初に分からなかったのは、どうしてなのでしょう。
そして、それが^{あと}後になって分かったというのは、何がどうしたからなのでしょう。

皮肉な預言の言葉 (19)

- ・一連の出来事を^ま目の^あ当たりにしたファリサイ派の人々は、次のように言います。「世をあげて あの男(イエス)について行った・・・」
- ・この後、彼ら(ファリサイ派の人々や祭司長たち)は群衆の力を借りて イエスを十字架刑に処し、その殺害に成功します。その意味では、すなわち直後のこととしては、彼らの狙いどおりに 事が成ったと言えるでしょう。人々はイエスを捨て、ついていかなかったのですから。
- ・けれども、事を歴史の進展の中で見るとき、すなわち長期の視点で見るとき、キリスト教はその後、広い世界へと伝えられていくことになります。世をあげて イエスについていくことになります。皮肉な進展がここにありはしないでしょうか。
- ・これは 敵対者による皮肉な預言の言葉で、ヨハネ福音書に独特な手法の一つとなっています。

.....

- ・わずか5日で歓喜から殺意へと変わってしまった群衆の心とは いったい、何なのでしょう。
 - ・それと 私たちの心とは、関係があるのかないのか？
- ・一方、その中へと踏み入っていかれた主イエスの思いとは はたして、
どんなものだったのでしょうか？
- ・そして、そんな主イエスに対する私たちの心のあり様^{よう}は はたして、どのようなものなのか？
 - ・私たちにとって、イエス・キリストを迎えるとは いったい、
どのようにあることであり、どのように生きることなのでしょう？